

空飛ぶヒロインの現実と虚構

『ガールズ・オウン・ペーパー』連載小説

「女性空軍補助隊のウォーラルズ」(*Worrals of the W. A. A. F.'s*) シリーズ

すぎ むら し の
杉 村 使 乃

はじめに

戦場で男性が戦闘に集中できるよう、身の回りのことや戦闘以外の業務に携わる「キャンプ・フォロワー」と呼ばれる女性たちがどの時代にも存在してきた⁽¹⁾。ヨーロッパを戦場に変えた二つの世界大戦において、イギリスの若い女性たちは未来の兵士の良き母親になる準備をするだけでなく、軍需工場や軍隊の後方支援に参加することが求められた⁽²⁾。第一次世界大戦の女性の活躍は、どんなに激しい抗議運動よりも女性参政権獲得をより現実的なものにしたかに見える⁽³⁾。第二次世界大戦下ではより広範囲に渡る業務が女性に解放され、中でも軍服や軍服に類似した制服を身に付けて戦時活動に従事した女性たちは、雑誌や映画などの大衆メディアで華々しく取り上げられた。「国のために戦う」一員であることを視覚的にもアピールする制服姿は、「輝く女性」として当時の人びとの目に映ったことだろう⁽⁴⁾。

主に中産階級のスクールガールたちの支持を得ていた雑誌『ガールズ・オウン・ペーパー』(*Girl's Own Paper* 1880 創刊、以下 GOP と記す)はこの制服姿の女性を「輝く女性」として表象した媒体の一つである⁽⁵⁾。ダンケルクからの脱出を執行し、バトル・オブ・ブリテンが始まる 1940 年、その年の 10 月号から GOP に最も顕著に戦時色が表れる。看護・救急医療、陸海空軍補助、消防補助、軍需工場、農業、その他、地域のボランティア団体など、多様な部門で活躍が期待される若い女性の制服姿の美しい彩色画がユニオン・ジャックと共に表紙を飾った⁽⁶⁾。また記事では表紙で扱われた組織や団体の詳しい説明や体験談が紹介される。GOP は女性の戦時貢献を、エルシュテインの言う「新しく見いだした女性の社会的アイデンティティー」としてアピールした⁽⁷⁾。(エルシュテイン 1994, 289)

この時代の娯楽雑誌では短編や連載小説は重要なコンテンツであった。GOP の戦時活

動への姿勢は掲載される小説にも反映された。一連の制服姿の表紙が始まった1940年10月号に連載を開始した『女性空軍補助隊のウォーラルズ』(*Worrals of the W.A.A.F.'s*)は1941年9月まで続いた。その後、シリーズ化し、戦後も継続した。主人公、ジョーン・ウォーラルソン (Joan Worralsen、通称 Worrals) は、1939年に結成された空軍の後方支援を行う女性部隊 (Women's Auxiliary Air Force、以下 WAAF) に所属している。二つの大戦で重要性を増した空の戦場と航空への関心の高まりの中で生まれた作品である⁽⁸⁾。

本稿では GOP 掲載の「ウォーラルズ」シリーズを追うことによって、戦争が女性向けの冒険小説にどのような影響を与えたか、そこで航空のイメージがどう使われたか、またそれらが戦後どのように変化するのかについて考察する。はじめに、第一次世界大戦時に戦闘機を操り、自らをキャプテンと名乗る作者ウィリアム・アール・ジョンズ (Captain William Earl Johns 1893-1968) と彼の作品の時代背景を考える。次に第二次世界大戦下の GOP が戦争の推移と共にどのように変化したかを踏まえ、「ウォーラルズ」シリーズの位置づけを確認する。第二次世界大戦時、多くの女性たちが戦時活動に動員され、「自分のできるわずかばかりのことをする」(“doing her bit”) ことによって、国家に貢献した女性像は、少女たちにもあるべき姿として発信された。しかし、「ウォーラルズ」シリーズで興味深い点は、戦時の女性に求められた以上の冒険が含まれている点である。女性はいちより多くの男性を戦場に送るため、男性領域とされてきたものへの進出が許されたが、戦後、その「失地回復」のため、女性は次々に動員解除 (demobilization) される。WAAF を動員解除されたウォーラルズの戦後の冒険には戦時の経験がどのように反映しているだろうか。

1 キャプテン・W. E. ジョンズとその時代

W. E. ジョンズ は第一次世界大戦時に、後にイギリス空軍 (Royal Air Force: RAF) となる組織 (Royal Flying Corps) で航空インストラクターとして勤めた後、少尉 (Second Lieutenant) として西部戦線に赴く。その後、RAF の航空中尉 (Flying Officer) になる。1927年には予備軍に、そして1932年に任務を離れる⁽⁹⁾。

その後、新聞の航空通信員の経験を経て、自ら *Popular Flying* (1932年4月号-1939年9月号) という雑誌を発行する⁽¹⁰⁾。ここで *The Camels are Coming* (1932) を皮切りにビッグلز (Biggles) と呼ばれる男性パイロット、ジェイムズ・ビッグلزワース (James Bigglesworth) を主人公としたシリーズがスタートする。このシリーズは雑誌連載の後、100タイトル以上の単行本として出版された。パイロットの称号「キャプテン」をペン

ネームに使っているように、作者自身の飛行訓練や戦闘機操縦、そして空軍での経験が色濃く反映している作品である。

戦争は児童文学のテーマの一つとして重要だが、戦間期に誕生した「ビグルズ・シリーズ」は、戦争のあり方を批判的に問うたり、命の尊さを主張するというより、戦争や国家間の衝突を背景とした、ミステリーや犯罪小説に影響を受けたある程度決まったプロットを持つ、商業主義的な大衆娯楽小説として位置づけられる⁽¹¹⁾。また、外国人や植民地における先住民族の描き方は、現在の視点で見ると問題点が多い。第二次世界大戦時には戦局を反映して、悪役は圧倒的にナチス・ドイツ軍であり、『ボルネオのビグルズ』(*Biggles in Borneo* 1943年)では日本軍の残虐性が強調されている。戦後、彼の作品の多くは「平和な時代にふさわしくない、軍国主義的な価値観、英雄崇拜、人種的偏見 植民地独立後の新生イギリスがめざす平等主義や国際協調主義にそぐわない」と教師や図書館員から不評を買い、その多くが学校や公立図書館からは排除された。しかしながら、「好戦的愛国主義の神話」への郷愁を持つファンはどの時代にも存在し、ヨーロッパを中心に翻訳され、ペーパーバック版は現在でも売れ続けている。(ハント 1995, 325) イギリスでは長きに渡る帝国の拡大に伴い、支配者としての西洋を肯定的に描く多くの文学が産出されてきた(サイード 1993, 1998)。児童文学の殆どが大人の手によって書かれ、教育的な一面を持っている以上、帝国を担う若い世代に向けた文学も帝国主義や植民地主義に加担したという非難を免れない面がある⁽¹²⁾。

賛否両論あるものの、ジョーンズは文学の教育的効果を意識し、文学による「非公式の教育」(“informal education”)の効果を意識した作家と言えるだろう⁽¹³⁾。

First of all for the entertainment of the reader. That is, I give boys what they want, not what their elders and betters think they ought to read. I teach at the same time but under camouflage. Juveniles are keen to learn but the educational aspect must not be too obvious or they become suspicious of its intention. I teach a boy to be a man, for without that essential qualification he will never be anything. I teach sportsmanship according to the British idea...I teach that decent behavior wins in the end as natural order of things. I teach the spirit of team work, loyalty to the Crown the Empire, and to rightful authority...

階級や国籍を超えた仲間たちと協同し、一介のパイロットから一つの軍を率いるリーダーに成長していくビグルズ。娯楽というカムフラージュの奥に、スポーツマンシップ、チームワーク、国家への忠誠という資質の重要性を少年たちに伝える。彼はファンからの

反応からも、自分が創ったヒーローに少年たちが大いに影響を受けていることを確信している。ここでジョーンズは、彼の読者層を少年たちとして想定しているが、彼の作品を多くの少女や若い女性たちも楽しんでた。また、彼は「ウォーラルズ」シリーズにおいて、リーダーシップ、チームワーク、国家への忠誠の重要性を作品を通して伝え、彼の「非公式の教育」は少女や若い女性にも波及した。

II GOP 連載の「ウォーラルズ」

ジョーンズが GOP 上に「ウォーラルズ」シリーズを開始したのは 1940 年。「ビグルズ」シリーズで既に成功を収めていた彼を戦時プロパガンダに協力させるため派遣したのは、情報省 (Ministry of Information) であると言われている⁽¹⁴⁾。ジョーンズは、「ウォーラルズ」以外にも、いくつかの連載小説と航空に関するエッセイを担当した。ジョーンズが「ウォーラルズ」シリーズを開始したのは、ナチス・ドイツ軍がヨーロッパ大陸を席卷する中、アメリカ・ソ連が参戦を見合わせていたためイギリスが孤独な戦いを強いられていたバトル・オブ・ブリテンの時期と重なる⁽¹⁵⁾。戦場へ送られた男性たちに代わり、女性たちが社会活動の様々な場面で活躍し、ホームフロントを守ることを求められた。1941 年 12 月、「国家総動員法」(National Service No.2 Act) により、イギリスは組織的に女性を戦時活動へ動員し、多くの女性たちが軍隊の後方支援にも携わった。こうした社会背景は GOP にも影響し、ジョーンズは少年向けの「ビグルズ」シリーズだけでなく、少女向け雑誌にも戦場を舞台とした冒険小説を提供した。

第二次世界大戦時に連載された「ウォーラルズ」シリーズは三作である。『女性空軍補助隊のウォーラルズ』(*Worrals of the W.A.A.F.'s*) のヒロイン、18 歳のジョーン・ウォーラルソン、通称ウォーラルズは、1939 年結成の空軍の後方支援を行う女性部隊 WAAF の空軍少尉 (pilot officer) である。その後、シリーズでおなじみとなる一連のキャラクターが導入される。一つ年下の友人・同志 (comrade) は、そばかすのためにフレックス (Betty Lovell, Frecks) と呼ばれ、この二人の外見は対称的に描写される。ウォーラルズは “pretty” では決してなく、“too regular” な顔立ちだが、形容しがたい魅力があると説明される。

She was dark; her hair was brown, and always tidy: her eyes, the same colour, were steady and thoughtful except when softened by a flash of humour – (GOP 1940 年 10 月号 1)⁽¹⁶⁾

その聡明な瞳はときに“aggressively”に煌く。彫りの深い顔立ちで、“air of authority”がある。初等学校の頃から、スポーツの場でリーダーを勤めていた。この時代の女子教育の一面が垣間見られる。

一方、フレックスは金髪碧眼であるが、「知的なブルネット」と「女らしい金髪美女」というありがちなペアとしては描かれない。フレックスも非常に活発で、むしろ身なりにかまわないタイプであり、そばかすを「レモンジュースでケアしたら」というアドバイスを笑い飛ばす。(GOP 1940年10月号2) MAYSと署名のある挿絵によって、ウォーラルズとフレックスのスマートな制服姿や秘密の任務の際の私服姿が描かれるが、テキスト上には二人の外見やファッションについては詳しく言及されない。しかし、自分が女性として魅力的であることはわかっているようで、ときおり自分の女性性を戦略的に使わないこともない。

フレックスはウォーラルズの判断力と臨機応変な行動力に心酔しているが、もう一人、ウォーラルズの魅力に抗しがたいものを感じているのがRAF所属のビル・アシュトン(Bill Ashton)である。シリーズ一作目から、彼女の動向に気を配り、応援し、危機的な状況には強力な助っ人となる。そして二作目からは、彼女に対し並々ならない愛情(それが報いられることはないが)を感じていることが仄めかされる。WAAFのスローガンは“Support the Men Who Fly”なのだが、この小説に限っては“Support the Women Who Fly”という状況になっている。

ウォーラルズの活躍に助けられながらも、彼女の越権行為を苦々しく思っているのが所属基地の司令官(Commanding Officer: CO)のSquadron-Leader McNavishである。一話冒頭、ウォーラルズはビルに戦闘機Reliantに乗せてもらい、銃の操作を教わるが、そのことについて厳しく注意される。「いざという時のために」という彼女の言い訳に対して、「もし若い女性にそれが必要であるときがくるとしても、まだその時ではない」と言い放ち、ウォーラルズとビルに休暇取り消しの処分を下す。ウォーラルズとフレックスは、スコットランド、アバディーン出身で訛りが強い彼を“old bear”と陰口を叩くが、彼は女性差別的な人物というよりも、組織の秩序を優先する上司として描かれる。

退屈な日常は、冒険物語のスタートとしてお決まりのパターンの一つだが、このシリーズも、戦時下にも関わらず、ウォーラルズが相棒のフレックスに自分の任務について不満を述べる場面から始まる。

“The fact is, Frecks,”...“there is a limit to the number of times one can take up a light plane and fly it to the same place without getting bored. Four or five times a week for three months I’ve been doing just that, taking battered Tiger-Moths back

to the makers for reconditioning. It's about as exciting as peddling a push-bike along an arterial road – less, in fact, because on the road there are at least hogs who try to push you off. Men can go off and fight, but girls – oh no.” (GOP 1940 年 10 月号 1)

ここでウォーラルズは、戦闘機を基地から工場へと輸送する任務についている。しかし実際の WAAF は、清掃、調理、応急手当、事務などに従事していた。ウォーラルズの飛行機操縦については、空軍所属の伯父の推薦があり、戦前に単独飛行の経験があったため許可されていると説明されているが、戦場へ出ることはもちろん、戦闘機の輸送も WAAF には許されていなかった。

ウォーラルズに休暇取り消し処分を与えた矢先、間がわるいことに、上層部の命令によりマクナヴィッシュはウォーラルズに Reliant の輸送を命じるはめになる。一つ一つの機種は毎回明記されるが、空爆に警戒し、RAF の活躍を期待していた読者にとって、個々の機種の区別は難解ではなかつただろう。輸送に過ぎなかつたはずの任務中、彼女は周囲にいる味方の戦闘機同様、逃亡中の敵機の爆破を無線で命じられる。退屈な日常はリアルな冒険へと一転し、軽い気持ちでビルに教わった爆撃装置の使用を実践することになる。敵機を撃墜するという任務を目の前に、現実の戦争を実感する。

In her heart she hated war, but lately she had learned to hate more those who made it inevitable by wanton aggression or by forcing barbaric creeds and doctrines upon those who only sought peace. When that happened, then resistance was the only answer. At such times every member of the threatened community owed a duty to the State, and once that decision was made there could be no turning back, no flinching from the ordeals that must certainly arise, however distasteful they might be. Had she failed to do what she had just done, then not only would she have betrayed the allegiance she had sworn when she accepted the King's Commission, but she would have proved herself unworthy of her uniform and all that it stood for. (GOP 1940 年 11 月号 46)

破壊と殺人を忌み嫌っているが、そこからひるめば身に付けている制服が象徴する国家への忠誠を覆すことになる。女だてらに敵機を撃墜したウォーラルズの手柄を上司は面白く思わない。女性がイギリス空軍戦闘機を操縦したことが敵にばれたら、「RAF は女に頼る女々しい空軍である」とプロパガンダに使われるに違いないと懸念する。作者ジョンズ

は、すでに男性パイロットの「ビッグズ・シリーズ」で、危機的な状況における判断力と行動力の行使、国家への忠誠を实践することの重要性を伝えていたが、登場人物の性差に関わらずウォーラルズにもそれらを実践させている。

その後、ウォーラルズはドイツの空爆を密かに誘導する国内に滞在するスパイの存在を嗅ぎ付け、敵からの攻撃を食い止める活躍を見せる。実際に、ナチス・ドイツ軍によるイギリス本国への激しい空爆が続く中、ウォーラルズの暴く陰謀はリアルに感じられただろう。

シリーズ第二作、*Worrals Carries On* (GOP 1941年10月号～1942年9月号連載)では、ウォーラルズはシャーロック・ホームズを思わせる推理力を発揮する。基地に一機だけ遅れて戻ってきた戦闘機の点検中、ウォーラルズはイギリス本国には生息しない、フランスで栽培されているゼラニウムの葉が一枚付いているのに気づく。その機体が海峡を渡り、ドイツ占領下にあるフランスに着地したとするならば、給油なしで帰ってくることは不可能である。手持ちのハンドローションの空き瓶に戦闘機に残っていた燃料を分けて貰い、イギリス軍使用のものと比較する。すると、どうやらタンクに入っているのはドイツ軍が使用している燃料らしい。そこから、彼女はその戦闘機のパイロット、最近赴任したベルギー人 (Leon Joudrier) がスパイではないかと疑う。ウォーラルズは、彼が実はドイツ人でイギリス軍の情報を漏洩していたことを発見する。更に彼女はイギリス軍のシンパであるフランスのレジスタンスと、また彼らに匿われているダンケルクから撤退できずにフランスに残らざるを得なかったイギリス人兵士たちと知り合う。彼らを救出し、イギリス本国に連れ帰るため、ウォーラルズはフレックスと共に決死の任務につく。ウォーラルズは過去のフランス滞在中に身に付けたというフランス語を駆使し、敵の目をくらすためフランス娘に扮する。この辺りの彼女の行動はもはや WAAF というよりは、諜報組織であった SOE (Special Operations Executive) の任務を思わせる。戦後、映画にもなり、その勇気と忍耐が讃えられた、敵の拷問を受け、強制収容所で命を落としたヴァイオレット・サボー (Violette Szabo 1921-1945) に代表される女性諜報員との類似が見られる⁽¹⁷⁾。2017年公開の映画にも取り上げられた「ダンケルクからの大脱出」⁽¹⁸⁾が1940年5月、6月に決行され、その後パリはドイツ軍の手に落ちる。軍部とも深い関わりがあったジョンズがイギリス軍の動きをどれくらい把握していたのかは定かではないが、ウォーラルズの冒険が同時代人に与えたであろうリアリティには驚かされる。

シリーズ三作目、*Worrals Flies Again* (GOP 1942年10月号～1942年12月号連載)の冒頭では、フランスでの冒険で絶体絶命の目に遭ったにも関わらず、ウォーラルズは再び日常に退屈している。

“There are times...when I could scream. There is a character of monotony about service life that gives me the willies. Drill, breakfast, more drill, lunch, tea, lectures, dinner, bed. Next day: drill, breakfast...” (GOP 1942 年 10 月号 6)

尚、彼女の肩書はここでは「空軍准尉」(Flight Officer)として紹介されている。フランスからの兵士救出劇は上層部にも伝わり、彼女の活躍に期待する諜報機関(Intelligence)から再度、困難な任務を与えられる。占領下の情報収集と伝達に苦勞する上層部は、敵に気づかれずに情報を手にするため、ウォーラルズとフレックスを再びフランスへ向かわせる。ロワール川河畔の古城に小型機で待機し、air messenger として重要な情報をイギリス本国に運ぶのが今回の任務である。管理人の他は誰もいないと思われていた城に到着すると、すでにそこはドイツ軍の駐屯地になっていた。要注意人物としてあらかじめ写真で知らされていたゲシュタポのリーダー (Wilhelm von Brandisch) は変装を駆使して、ウォーラルズを窮地に陥れる。「ビグルズ・シリーズ」に現れる強大なドイツ人の敵 (Erich von Stalhein) との類似が見られる。

中世の城を舞台にした二人の若い女性の謎に満ちた冒険はゴシック・ロマンスを思わせるが、ウォーラルズもフレックスもこの手の小説でおなじみの「虐げられる乙女」ではない。2人の判断力、行動力、航空機や武器を使うスキルは彼女たちをそれまでにない強力なヒロインにした。戦場で予想されるセクシュアル・ハラスメントや暴力にウォーラルズが悩まされることはない。その理由として次の点が挙げられる。GOPの主な読者対象がスクールガールであることから、恋愛や性に関する話題は避けられていた。またジョンズが携わったプロパガンダやリクルートの目的を考えると、WAAFその他の女性の戦時活動にネガティブなイメージを持たせることはご法度であっただろう。

As Frecks put it, “Adventure, like chocolate, is best taken in small quantities, otherwise it is liable to lose its flavour.” (GOP 1942 年 12 月号 24)

こうした可愛らしい比喩、ある程度の女性らしさ、また、恋には至らない崇拜者の存在は描かれるが、「ウォーラルズ・シリーズ」では女性の身体であるが故に予想される危険やハンデが除外され、ヒロインは戦時下のヒーロー的人物として描かれる。

III 「ウォーラルズ」に見られる現実と虚構

前述したように「ウォーラルズ」の冒険の多くはWAAFとしては越権行為に当たる。

そして、ジョンズがこのシリーズで描いた虚構性は、ウォーラルズをその時代のジェンダー規範を超えたヒロインにしている。

WAAF という組織と任務についての事実は以下の通りである。歴史上初めての「総力戦」となった第一次世界大戦で、イギリスは女性を軍隊の後方支援に動員した。しかし、平時においては女性の援護を必要とするべきではないと多くの主張があったため、戦後、殆どの組織は解散した。第二次世界大戦では、第一次世界大戦後に解散した WRAF (Women's Royal Air Force) に代わり、1939 年に WAAF が結成される。主な任務は事務、調理、配膳、運転手などだが、一部は指令室で、地図上で敵機を追跡したり、レーザー探査で活躍したりするものもいた。終戦までに延べ 18 万 2 千人の女性が WAAF で働いていたと言われている。1941 年に WAAF は正式に空軍の一部と認められる。輸送も含め、戦闘機の操縦は一切許可されなかったが、「男性の仕事」と考えられていた空襲時に敵機を威嚇する阻塞気球 (barrage balloon) の操作は WAAF にも開かれた (Anderson 1994, 138-139)。

前述したように、戦間期に航空機は大きな進歩を遂げ、1930 年代は航空クラブが人気を博し、エイミー・ジョンソン (Amy Johnson 1903-41) やポーリーン・ガワー (Pauline Gower 1910-47) など、ジョンズとも交流があった著名な女性パイロットが登場した。GOP でも女性パイロットや航空を扱った小説が掲載されている。こうした経験者は RAF あるいは WAAF に勧誘されるが、WAAF は女性の操縦は認めていなかったため、ジョンソンやガワーは民間組織 ATA (Air Transport Auxiliary) で働くことを選んだ。ATA は軍需工場から基地までの飛行機の輸送を担当する。この ATA の業務を小説では WAAF のウォーラルズが担っている。男性と遜色ない経験と技術を持った女性パイロットたちは、最初は古いタイプの Tiger Moths の操縦を任された。(Cooper 2003, 21) 小説では、ウォーラルズが Tiger Moths を輸送し、ビルが Reliant を任されている。事情に詳しいジョンズは細部に至るリアリティを追求している。

ジョンズは、WAAF の業務内容を誤解し、ウォーラルズに戦闘機を輸送させているわけではない。彼は小説に加え、“Behind the Joystick” という航空エッセイを GOP に連載していた。航空に興味ある読者に向けて、飛行機の操作や、航空クラブの活動について紹介するものである。1941 年 11 月号で WAAF の仕事を紹介する “Life in WAAF” (3-5) において、WAAF では女性はパイロット (“fighter pilots”) になれないこと、ATA であれば戦闘機の輸送に携われると書いている。

性差による任務の違いを設ける理由は明らかでないが前置きしつつ、RAF 候補生を育てる組織は航空省 (Ministry of Air) の管轄で少年向けのみが用意されていること。第一次世界大戦後がそうであったように、WAAF は終戦とともに動員解除されると予想して

いること。これらを鑑み、戦後は廃止される組織に多くの税金を使えないため、女性候補生を訓練する組織がないためではないかと推測している。また、女性が十分優れたパイロットになれることを認めつつも、戦闘機の操縦と空中戦は女性の任務になりうるとは決して思っていない。また、前述したようにウォーラルズの任務には、諜報機関 SOE との類似が見られる。実際に、WAAF から SOE (Special Operations Executive) に 15 名の女性が配属されたと言われている。(Spencer 2016, 140) 現実と虚構が入り混じり、ウォーラルズのキャラクター造形と冒険が構築されたと言えるだろう。

「ウォーラルズ・シリーズ」の WAAF の脚色については、GOP 掲載の小説のジャンルのコードも関係しているであろう。それまで若い既婚者までも対象としていた読者層は、1930 年代はスクールガールへと変更する。1 年分をまとめた Annual の表紙には、小説のジャンルは冒険もの、ミステリー、学園もの、スポーツの 4 つが挙げられ、1938 年以降は冒険もの、ミステリー、学園ものの 3 つに集約される。そこでは家庭の担い手というよりも、リーダーシップ、チームワーク、友情が主なテーマとなる。「ビグルズ・シリーズ」で戦場における友情やチームワークの重要性を描いてきたジョンズにとって、「ウォーラルズ」で同様のテーマを扱うことは難しくなかっただろう。パイロットであるジョンズ自身は、RAF 及び WAAF の魅力は空にあると考えていただろう。依頼された WAAF のリクルートを成功裡に治めるためにも、ヒロインを空に飛ばし、スパイもののような謎と冒険に満ちた物語を提示する必要があったと考えられる。戦時活動をきっかけに自己実現するヒロインの冒険は他の GOP の小説にも見られたが⁽¹⁹⁾、「ビグルズ」の女性版を期待されているジョンズにとって、例え現実に即していたとしても、ウォーラルズの冒険をキッチンや事務室に設定する訳にはいかなかっただろう⁽²⁰⁾。

IV 「動員解除」(demob) と「ウォーラルズ」の遺産

GOP1945 年 11 月号から、1946 年 6 月号まで、*Worrals in the Wilds* が連載される。1944 年と 1945 年については確認できていないが、少なくとも 1940 年 10 月号から 1943 年 12 月号までは表紙に印刷されていたユニオン・ジャックと制服姿はこの期間に消失する。1945 年 11 月号は編み物にいそむ可愛らしい女の子で、それ以降、ファッション、スポーツ、絵画や手芸などの趣味、そして旅行をする若い女性が表紙を飾る。

戦時活動に携わった多くの女性たちが終戦間際、あるいは戦後に経験したように、ウォーラルズとフレックスも WAAF から動員解除され (demobbed)、その後の人生を模索していた⁽²¹⁾。二人の住むアパートに RAF だったビル・アシュトンが訪ねてきたとき、フレックスは彼がウォーラルズを花嫁として連れていくだろうと予想していた。金鉱開発

をしている叔父を手伝うため、「暗黒のアフリカ」(“Darkest Africa – with a capital D for Darkest” GOP 1945 年 11 月号 9) に旅立つという。花嫁としてウォーラルズを伴いたいと求婚するビルだが、ウォーラルズは「戦争も終わったから少しリラックスしたい」とにべもなく断った。しかし、間もなく彼の便りが途絶えたため、ウォーラルズはフレックスと共にビルの消息を追ってアフリカへ自身が操縦する小型機で飛び立つ。フレックスはウォーラルズがアフリカで探すのはビルばかりではなく、むしろ冒険ではないかと疑念を持っている。

Aside from ...at the back of her [Freck's] mind, she had a suspicion that Worrals was looking something else besides Bill. Adventure. (GOP 1945 年 11 月号 9)

ビルが中継地点として使っていると言っていた、イギリス政府が現地に委託して管理しているはずの空港は見知らぬ外国人に乗っ取られていた。ビルと彼の伯父が持つ金鉱に起因するトラブルにウォーラルズとフレックスも巻き込まれていく。興味深いのはウォーラルズとビルの結婚でこの物語は終わらないことだ。

その後、ウォーラルズはフレックスと共に、オーストラリアに旅立つ。1946 年 10 月から、1947 年 7 月号 *Worrals Down Under* が連載される。WAAF の遺産ともいえる、女同士の友情と冒険が描かれる。そもそもウォーラルズとフレックスがオーストラリアを訪れたのは、二人で航空会社を立ち上げられないかと考えたからである。イギリス本国は既に大企業が幅を利かせており、オーストラリアにビジネス・チャンスを求めてやってきた。フレックスは自分が開放的なこの土地に合っていると述べる。そこで偶然出会ったのは戦時貢献で勲章 (George Cross) を授与された友人 (Janet Marlow) であった。彼女はオーストラリアに住む伯母 (Aunt Mary) の元に身を寄せていたが心配ごとがあるらしい。実は伯母の土地はオーストラリア特産のブラック・オパールが取れるため、そこを狙う輩とのトラブルに巻き込まれていた。「戦友」である 3 人の女性が力を合わせて不正に立ち向かう冒険が描かれる。

動員解除後、女性たちは男性たちに職場を譲り、家庭に入ることが望まれていた。しかし、飛行機を操る空飛ぶヒロイン、ウォーラルズとフレックスには家庭とは違う冒険の場が残されていた。

おわりに

第二次世界大戦を舞台に戦闘機を操り、敵地に乗り込んだウォーラルズを「フェミニス

ト」(“pioneering feminist”) と考えるか、それとも禁欲的に国家のために自分のやれることをやった(“the stoic ‘doing her bit’”) 忠実な「国民」に過ぎないのかは議論が別れるであろう。(Spencer: 2016 140) ウォーラルズのキャラクターと冒険については、作者ジョンズが女性の社会進出や自己実現を支持していたというよりも、戦時下においては、男女ともに自立心、決断力、行動力が必要と考え、そうした資質を彼のヒロインにも付与したただけであろう。

一方、「フェミニスト」とは考えにくい、少なくともパイロットとしての経験を持っていたジョンズは航空機操縦の技術においては、性差は問題にならないと考えていた。皮肉にも空の戦場と飛行機というテクノロジーは、男女間の肉体的な差異を超えることを可能にした面がある。ダナ・ハラウェイが「サイボーグ・フェミニズム」という考えを提唱したように、ウォーラルズのようなヒロインにおいては、飛行機というテクノロジーが確かにエンパワメントになっている。作者の意図とは必ずしも一致していなかったかもしれないが、「ウォーラルズ・シリーズ」の空飛ぶヒロインは、戦時中、そして戦後にも家庭や国境に縛られない解放的で自由な女性のイメージを発信した。

一方、戦後の「ウォーラルズ・シリーズ」において、解体しつつある帝国の痕跡をヒロインに辿らせるのもこのテクノロジーである。旧宗主国の彼女がアフリカやオーストラリアを旅し、そこでの不正を暴き、「正統な」ものへと富を分配する。女性が個人として解放されることと、自己実現することが、新たな帝国主義に加担するかもしれない点は批判的に考えるべきであろう。

大衆娯楽小説ととらえられがちなジョンズの作品であるが、戦争と児童文学というテーマ、冒険小説のヒーローやヒロイン像、また冷戦下で発展するスパイものや、現在に至るまでアニメやゲームでもてはやされる「戦闘美少女」⁽²²⁾ と「ウォーラルズ・シリーズ」の比較も今後、検討したい。

本研究は JSPS 科研費 JP15K01929 の助成を受けたものです。

注

- (1) 「キャンプ・フォロワー」については、エルシュテインの『戦争と女性』、エンロー (39-45) を参照のこと。
- (2) イギリスにおける女性の戦争協力については、Anderson, Brailey, Briggs, Cooper, Gane-Pushman, Harris, ルイス, Priestley, Wadge 他を参照した。第一次世界大戦と第二次世界大戦の女性の動員と活動内容については拙稿 (2006、2008、2010) も参照されたい。
- (3) 1918 年に制限付きで、1928 年には男女平等の選挙権が女性に与えられた。
- (4) エンローは、「一級市民」であることが「国のために戦う」と強く結び付けられ、「市民権」そのものが「男性化」していることの問題点を指摘している。湾岸戦争以降の米軍に

- おける大量の女性兵士の参戦は、これが男女平等の行き着く先なのかと議論を醸した（エンロー 2006, vi, 145-169）。
- (5) 「宗教叢書協会」(Religious Tract Society) は既に人気を得ていた『ボーイズ・OWN・ペーパー』(*Boy's Own Paper*) 読者の姉妹たちの要望に応え、1880 年に GOP を創刊した。1956 年の廃刊までの長期間にわたり、それぞれの時代に求められる女性像を発信する役割を担った。20 世紀初頭までは、キリスト教精神に基づく「良妻賢母教育」を推進。(Forrester 1980, 5-6) GOP の読者層は集方針によりターゲットが変化した、時期によっては、女性労働者、25 歳くらいまでの未婚・既婚女性まで広い読者層をカバーしていた。女子教育や女性雑誌の歴史と変遷については Beetham, Butts, Dyhouse, Cadogan & Craig, Drotner, Edwards, Forrester, 川端, Reynolds, Tinkler, 拙稿 (2012) を参照。
- (6) 1930 年代以降の GOP のカバーガールの表象について Cadogan and Craig は “Typically English’ models with golden page-boy bob unruffled by their dog-walking, horse-riding, swimming, hockey or lacrosse, they might equally have symbolized the fictions ‘racially-pure Aryan’ ideal of the Hitler Youth” と評している。(Cadogan & Craig 2003, 310) 1940 年代以降の制服の女性たちの表紙の殆どは McKinlay によるものであるが、絵画であるが故により上記の傾向が強められた。
- (7) 戦時下のリクルートへの関与は読者層にもよる。戦時活動が従来のジェンダー規範を逸脱する面を持っていたこと、また、幼い子どものいる母親は動員の対象から外されていたことから、消極的な雑誌もあった。実際、どのくらいの女性が影響を受けたかは明らかではないが、戦時活動に割いたページの割合は GOP が突出している (Cadogan & Craig 2003, 300-325, Tinkler 1995, 108)。
- (8) リンドバーグの大西洋横断飛行は 1927 年、「1932 年の時点で飛行機は戦闘、輸送、調査、刊行、冒険の手段であった」と富山は指摘する。また、パラシュート降下を含む航空ショーでは女性も活躍していた (富山 1993, 10-11)。
- (9) ジョンズの生涯については Berresford Ellis & Schofield 他を参照。
- (10) この雑誌については、<http://www.popularflying.com/> (2017 年 8 月 17 日取得) が詳しい。
- (11) 大衆娯楽小説 (popular fiction) というジャンルについては Glover を参照。
- (12) 児童文学に限らず、戦時下の文学作品の多くは総力戦に必要な「適切な国民」として教育するために大きな役割を果たしたとして、昨今、戦時中の文学を批判的に読み直す研究成果が発表されている。Samuel, Edwards 他。日本においても鳥越信らにより、『はじめて学ぶ日本の戦争児童文学史』(ミネルヴァ書房、2012 年) が出版されている。Mackenzie は児童文学の帝国主義のプロパガンダとしての側面をとらえ (Imperialism and Juvenile Literature 199-216)、ジョンズや他の作家が標榜した「愛国主義」「軍国主義」「外国人嫌い」「人種差別主義」を指摘している (Mackenzie 1984, 218)。
- (13) Spencer は読書の影響を「非公式的教育」(informal education) と呼び、特に学校という制度が全うされない戦時下においては大きな影響力を発揮すると指摘する (Spencer 2016, 137)。
- (14) The Secrets of W.E. Johns Correspondence Archive <http://www.wejohns.com/> (2017 年 7 月 30 日取得) 参照。
- (15) バトル・オブ・ブリテン、及びドイツ軍による空爆 (Blitz) については Calder, Connelly, Harrison, Hastings, Rodger, また拙稿を参照。荒井と田中の著書は空が戦場になった後の歴史と問題点を概観できる。

- (16) GOP には一年分をまとめた Annual と呼ばれる版があり、また「ウォーラルズ」は後に加筆され単行本となるが、ここでは最初に連載された GOP のページ番号を用いる。
- (17) サボーについては <http://www.violette-szabo-museum.co.uk/> (2017 年 8 月 17 日取得) を参照。
- (18) 『ダンケルク』(*Dunkirk*) クリストファー・ノーラン監督・脚本・製作
- (19) 戦時活動をテーマにした GOP 掲載の他の小説については、拙稿 (2012) を参照のこと。
- (20) 当時、WAAF のリクルートは順調ではなかったため、航空省は「ビッグルズ・シリーズ」で人気を博したジョンズに新しいヒロイン創作を依頼した (Spencer 2016, 140)。
- (21) Philippa Levine 所収, Harold L. Smith “British Feminism in the Second World War” 参照。第一次世界大戦への女性労働者の重要な貢献にも関わらず、当初政府は、第二次世界大戦において女性の動員は最小限に、そして伝統的な女性の役割にとどめようとしていた。1941 年の女性動員に関する法は女性たちが労働条件の改善を求めるきっかけとなったが、戦後、こうした女性の運動は下火になった。1942 年 Restoration of Prewar Practices Act により、男性の仕事だと思われていた仕事に戦時中に従事した女性は戦争終結後、その仕事を失うことが事実となった (Levine 2009, 96-107)。
- (22) 精神分析学者の斎藤環が提唱した、日本の漫画やアニメにおける戦闘を行う少女たちの系譜。

参考文献

- Anderson, Bette. *We Just Got On With It: British Women in World War II*. Oxford: Isis, 1994.
- 荒井信一 『空爆の歴史：終わらない大量虐殺』 岩波新書 1144, 岩波書店、2008.
- Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own?: Domesticity and Desire in the Woman's Magazine, 1800-1914*. London: Routledge, 1996.
- Berresford-Ellis, Peter, and Jennifer Schofield. *Biggles! The Life Story of Capt. W. E. Johns*. Dorset: Veloce, 1993
- Briggs, Asa. *Go To It!: Working for Victory on the Home Front 1939-1945*. London: Mitchell Beazley, 2000.
- Butts, Dennis, and Pat Garrett. Eds. *From the Dairyman's Daughter to Worrals of the WAAF: The Religious Tract Society, Lutterworth Press and Children's Literature*. Cambridge: Lutterworth, 2006.
- Cadogan, Mary, and Patricia Craig. *You're A Brick Angela! A New Look at Girls' Fiction from 1839 to 1975*. London: Girls Gone By Publishers, 2003.
- Calder, Angus. *The Myth of the Blitz*. London: Jonathan Cape, 1991.
- Connelly, Mark. *Reaching for the Stars: A New History of Bomber Command in World War II*. I. B. Tauris Publishers, 2001.
- Cooper, Alison. *Women's War: Britain in World War II*. London: Hodder, 2003.
- Drotner, Kirsten. *English Children and Their Magazines 1751-1945*. New York: Yale UP, 1988.
- Dyhouse, Carol. *Girls Growing Up in Late Victorian and Edwardian England*. London: Routledge, 1981.
- Edwards, Owen Dudley. *British Children's Fiction in the Second World War*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009.
- エルシュテイン、ジーン・ベスキー 『戦争と女性』 小林史子・廣川紀子訳、東京：法政大学出版

- 局、1994。
- エンロー、シンシア『策略：女性を軍事化する国際政治』上野千鶴子監訳、佐藤文香訳、東京：岩波書店、2006。
- Forrester, Wendy. *Great-Grandmama's Weekly: A Celebration of The Girl's Own Paper 1880-1901*. Guildford: Lutterworth Press, 1980.
- Gane-Pushman, Muriel. *We All Wore Blue*. London: Pickering, 1989.
- Glover, David, and Scott McCracken Eds. *The Cambridge Companion to Popular Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2012.
- Harris, Carol. *Women at War: In Uniform 1939-1945*. Phoenix Mill: Sutton, 2003.
- ハラウェイ、ダナ『猿と女とサイボーグ』高橋さきの訳、東京：青土社、2000。
- 『サイボーグ・フェミニズム 増補版』巽孝之・小谷真理訳、東京：水声社 2001。
- Harrison, Tom. *Living Through the Blitz*. (1976) London: Penguin, 1990.
- Hastings, Max. *Bomber Command*. London, 1979.
- ハント、ピーター『写真とイラストでたどる子どもの本の歴史』さくまゆみこ・こだまともこ・福本友美子訳、東京：柏書房、1995。
- 川端有子『復刻版 ガールズ・オウン・ペーパー：別冊解説』京都：ユーリカ・プレス、2006。
- Levine, Philippa, and Susan R. Grayzel. Eds. *Gender, Labour, War and Empire: Essays on Modern Britain*. New York: Palgrave Macmillan, 2009.
- ルイス、ブレンダ・ラルフ著、松尾恭子訳『写真でみる女性と戦争』東京：原書房、2013。
- Mackenzie, Johan M. *Propaganda and Empire: The Manipulation of British Public Opinion, 1880-1960*. Manchester: Manchester UP, 1984.
- Martin Brayley. *World War II Allied Women's Services*. (Men-at-Arms357) Oxford: Osprey, 2001.
- , Richard Ingram. *World War II British Women's Uniforms In Colour Photographs*. Ravensbury: Crowood, 2001.
- Priestley, J. B. *British Women Go To War*. London: Collins, 1943.
- Reynolds, Kimberley. *Girls Only?: Gender and Popular Children's Fiction in Britain 1880-1910*. Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1990.
- Rodger, George. *The Blitz: the Photography of George Rodger with an Introduction by Tom Hopkinson*. London: Penguin Books, 1990.
- サイード、エドワード『オリエンタリズム』今沢紀子訳、東京：平凡社、1993。
- 『文化と帝国主義』大橋洋一訳、東京：みすず書房、1998。
- 齋藤環『戦闘美少女の精神分析』東京：太田出版、2000。
- Samuel, Raphael. *Patriotism: The Making and Unmaking of British National Identity. Volume I: History and Politics*. London: Routledge, 1989.
- Sheridan, Dorothy. Ed. *Wartime Women: A Mass-Observation Anthology 1937-45*. New York: Phoenix, 2000.
- Spencer, Stephany. "No 'Fear of Flying'?: Worrals of the WAAF, Fiction, and Girls' Informal Wartime Education." *Paedagogica Historica: International Journal of the History of Education*. Vol. 52: No. 1-2, 2016, 137-153
- 杉村使乃「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」

- 『敬和学園大学研究紀要』第15号2006.
- 「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性像」『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』第6号2008.
- 「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦のイギリス——女性表象再考：制服の女性たちを中心に——」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第8号2010年.
- 「『ガールズ・オウン・ペーパー』に見る第二次世界大戦下のイギリス女性像」『敬和学園大学研究紀要』第21号2012.
- 田中利幸『空の戦争史』東京：講談社、2008.
- Tinkler, Penny. *Constructing Girlhood: Popular Magazines For Girls Growing Up In England, 1920-1950*. (Gender & Society: Feminist Perspectives on the Past and Present) London: Taylor and Francis, 1995.
- 富山太佳夫『空から女が降ってくる：スポーツ文化の誕生』東京：岩波書店、1993.
- Wadge, D. Collett, Ed. *Women in Uniform*. London: Imperial War Museum, 2003.